時間学公開学術シンポジウム 2021　―働き方・子育て・時間―
2021.6.19（土）

趣　旨　説　明

新型コロナウイルス感染症の拡大により、医療従事者の安全や過剰な負担、そしてコロナ以外の患者の入院・治療への影響がしばしば問題視されています。実はこのコロナ禍により、保育者と子どもも別の意味で大きな負担を強いられています。

活発な活動と他人との親密な交流を必要とするはずの子どもたちはマスクとソーシャルディスタンス、手指消毒を求められ、そのストレスが保育者に向かう現状もあります。

かつての牧歌的な時代とは異なり、現在の保育者は社会や親から実に多くのことを求められるようになりました。そして多くの親も、そうした保育者に子どもを預けて働きに出なければならなくなりました。幼稚園や保育園、そして家庭で過ごす親と子の時間の流れ方は確実に変わったのですが、社会のシステムの方が、まだその変化に追いついていないように感じられます。コロナ禍はこの状況にさらに拍車をかけているように見えます。

そこでこのシンポジウムでは、3 人のパネラーに登壇を願い、それぞれの視覚から現状を報告して貰うことといたします。また就学前の子どもだけではなく、広く就学後の子どもたちの生活時間も検討対象としています。

最初の前田志津子氏には、日本とは環境の異なるカンボジアの子どもたちについて報告をして頂きます。これによって日本の子どもの時間の過ごし方を相対的に見ることができます。そしてカンボジアの子どものような時間の過ごし方を、かつては日本の子どももしていたとすると、日本の子どもがなぜこんなに変わってしまったのかを理解するきっかけにもなると思います。

次の川俣美砂子氏には、保育者の働き方の現状について種々のデータに基づいて報告をして頂きます。昔にくらべて忙しくなったと言うだけではなく、今の保育者がどのように働き、どのように忙しくなり、それがどんな影響を保育者に与えているのかを具体的に示してくれます。

最後の大久保心氏は、就学児の生活時間について説明し、続いて保育園や認定こども園などの実態調査を踏まえて、就学前の子どもの生活時間の在り方について報告してくれます。さらに子どもたちの時間の過ごし方と教育格差の問題にも切り込みます。

続いて以上の 3 報告を踏まえて、松村律子氏にコメントを頂きます。子ども・保育者・親それぞれの生活時間の現状は、生物としての人間という観点から見るとどう評価されるのか、興味深いところです。

その後、右田裕規氏を司会に、報告者とコメンテーターにディスカッションをして頂きます。限られた時間ではありますが、これを通じて論点が深まればと思います。参加者からのご質問もできれば受けたいと思います。

このシンポジウムで、参加者が子どもや保育者、そして親の生活時間を客観的に眺め、よりよい在り方を模索する出発点となることを期待しております。

（コーディネーター　活水女子大学 細井浩志）